

復興ニッポン cha・cha・cha!

被災地の復興のために汗を流し、知恵を出している災害ボランティアの頑張りをお伝えする < 支え合い、助け合い、協働 > のための情報紙です。「みんなは、どんな活動しているの?」今すぐ知りたい、アイデアや取り組み。災害ボランティア最前線からお届けします。(※chaは「care」「help」「act」の頭文字) 発行：仙台市災害ボランティアセンター

◆災害ボランティア・スナップ◆

被災者の方を応援するため、1日でも早く普段通りの生活を取り戻していただくため、活動する災害ボランティア。活動の様子を、写真でお伝えします。

◎ボランティアの大事な足である自転車のカギ。管理やメンテナンスしやすいように番号が添付。(左)

◎災害ボランティア活動の現場まで、時にはバスで向います。(中)

◎津波が運んだ泥と格闘したウェアたち。ていねいに洗って乾かし、次の出番を待ちます。(右)



★コラム 鳥の目 虫の目 「ボランティアきずな館」オープン in 七ヶ浜

七ヶ浜町災害ボランティアセンター隣に、ボランティアの滞在拠点「ボランティアきずな館」が4月21日に完成しました。日本財団、NPO法人レスキューストックヤード、七ヶ浜町社会福祉協議会、七ヶ浜町災害ボランティアセンターなどの協働で実現に至りました。

プレハブの1階は炊事場や事務所スペースが、2階には畳30帖の部屋2つ(男女各1部屋)があり50名が滞在できるとのこと。災害ボランティアスタッフの交流拠点として期待大ですね。ホッとできる空間になりそうです。

様々な主体が連携して成果をあげていく「協働」の取り組みが、ますます各地で求められています。



●(左)ボランティアきずな館

2階の滞在スペース(右)●



インタビュー

東日本大震災で地域コミュニティではどのような避難や被災後の活動をしたのでしょうか。以前から地域コミュニティづくりに熱心に取り組む2つの地域にインタビュー。今回はその第1回目です。

普段の地域づくり活動が、助け合いと災害ボランティアに生きました！！

●八木山南地区社会福祉協議会 阿部利美さん

▼住民が関心を持つ町内会に！

11年前、私が52才の時、町内会と関わるようになり、従来通りの体質に危機感を覚えました。

当時の町内会は、広報やかかわら版も少なく、住民も自分の地域に無関心。このままではいけないと思い、平成13年に住民に対してアンケート調査を行いました。しかし、このアンケートも無記名が条件で、調査の許可に1年もかかりました。そのアンケートの中で「Q.災害時に自力避難できますか？」の問いに9名の方が「できない」と答えたのです。回収率25%でしたから、そうすると町内全体では約36名もの方が自力で避難できないということになります。これは大変なことですよ。しかも、アンケートは無記名で行われていますから、災害時に誰を助けに行かなければならないかが分からない訳です。そこで次は、記名式でアンケートを取らせて欲しいと強く訴えました。しかし、これがまた許可を得るまでに1年かかりました……。やっと取った記名式のアンケートは、回収率が91%まで増加し、上記と同じ質問には38名の方が「できない」と答えました。こういった方々を災害時にきちんと援護や救助ができるよう、地域コミュニティの強化が急務であると感じ行動に移すことになったのです。

以下のアンケート調査結果を得られたおかげもあり、地域住民は何らかの形で地域に参加したいという思いがあることを実感しました。



「Q.地域内の“社会福祉協議会、町内会、ボランティア”の方々と活動に参加することについてお聞かせ下さい」

- ・メンバーとして参加したい…………… 13名
- ・個人に過大な負担がかからず、楽しみながら役に立つのであれば
メンバーとして参加したい…………… 113名
- ・メンバーとして参加しない…………… 65名
- ・その他…………… 40名

▼街づくりプロジェクト！

まず、町内会に青年部を発足させました。住民に手伝ってもらう為のきっかけをリーダーが作らなければ！と思ったからです。働き盛りの世代が参加できるように、集まるのは夜。会議は集会所が主ですが、「明るいところでやると会議も活発化するのでは？」という提案もあり、ファミレスで開催することもあります。メンバーだけでなく、地域住民が共通意識や関心を持っていただくために、防犯や防災マニュアルなど取組む内容を回覧で徹底的にお知らせし、住民からの意見も頂きます。

本当は皆さん無関心じゃないんですね。きっかけが無かったただけなんです。そんな中、仙台市社協のモデル事業で八木山南地区が選ばれ、地域コミュニティの向上を目標に平成20年秋より街づくりプロジェクトチームを立ち上げることとなりました。プロジェクトの討論会は30回にもなり、試行しながら進めてきたと

ころ、現在プロジェクトは下記6つのチームにまでなりました。



1. 一心たすけ愛・・・電球交換などのお手伝いを通じて交流
2. ハタスケ隊・・・子供たちと学校の畑仕事のお手伝い
3. あ茶び場・・・子育てを応援する交流、遊びの場作り
4. チエの和塾・・・お話の集い、地域の方講師の講座など
5. まぞって月イチ・・・催しを通じた交流、自然体験など
6. 仲良く囲GO・・・集会所の2階で囲碁が楽しい

住民自身が積極的に関わり、行動し、繰り返し話し合うことで、世代間交流はもちろんですが、住民同士の信頼関係が築かれ、安心感や意欲も生まれたように思います。このように、ある程度まで地域コミュニティが出来上がっていたことが、今回の震災での対応に大きく活かされたのではないのでしょうか。

▼マニュアルどおりには機能しない！

震災時は自宅にいました。食器の落下が一番ひどくて、停電時に帰ってきた家族が怪我をしないように片付けてから地域の方の安否確認に出かけました。家を出るまで30分程かかってしまいました。

まずは、全戸にブレーカーを落とすように車で回ったのですが、ブレーカーが分からない人が実に多い！ブレーカーが何か、なぜ落とさなければならないのか、ブレーカーがどこら辺にあるのかを、その都度説明して回って、今までの防災訓練の内容を改めて見直さなければと思いました。

今までも防災訓練はやってきたし、地区の「自主防災 災害対策マニュアル」にも防災時の安否確認方法、避難方法など掲載して意識統一してきました。ですが、実際に安否確認の連絡が来たのは73班のうちたったの13班。「みんな一体なにをやっているんだ！」と最初は怒りがこみ上げてきましたが、実際問題あの状況下では安否確認どころではなかったですね。

より簡単で確実な方策を再考する必要がある。それにしても30年間～40年間に1度の大地震に備える防災体制づくりのスパンはあまりにも長く、継続性をどうするか頭をかかえます。

地震の翌日には、自主的に炊き出しに向けての行動が起きました。燃料と鍋があれば、材料は自分たちで用意するので炊き出しをしたいと申し出がありました。約300人分の食事があつという間に出来上がり、今までの地域ぐるみの活動をしてきた成果だと実感しました。

食事の用意は40代の主婦が主だって動き、男性陣は避難所に連日交代で泊まり込んでくれました。これも、一人一役という考えが浸透してきた結果だと思います。

幸いにも、八木山南地区は被災がそれほど大きくなく、避難所を使ったのは一週間でした。

▼これからは若い人に！

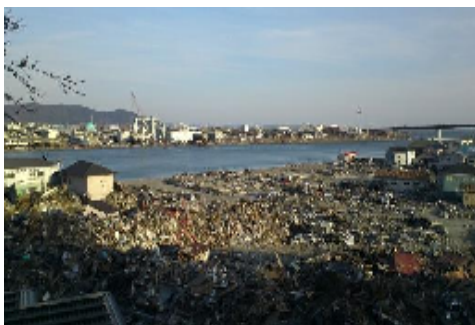
まずは生きた防災マニュアルの作成！シンプルな方法で有効な防災体制づくりを地域で考えていかなければと思います。また、これまでは40代～50代の青年部が中心となり活動してきたのですが、これからは20代、30代の若い世代に積極的にかかわってもらいたいと思っています。宮城県沖地震から30年で今回の大震災が起き、残念ながら宮城県沖地震の教訓を存分に活かすことができませんでした。たぶん30年後にはまた大震災が来るのではないかと思います。30年前の記憶をいかに次の世代に伝えていくかが大きな課題になっています。八木山南地区の反省会はこれからなので、地域のために何が出来るかを積極的に話し合っていきたいと思っています。さらに活動の内容をお知りになりたい方は、ヤフー・グーグルの検索欄に“八木山南街づくり”と入力し、ホームページをご覧ください。



4/17に石巻で片付け作業に行ってきました。実際に津波に襲われたお宅を訪問するのは初めての事です。70代後半と思われるご夫婦二人暮らしで、津波の当日は浸水してくる自宅2階に避難し、翌日自衛隊のボートが救出に来てくれて2階の窓から1階の屋根伝いに脱出したという事でした。津波被害を受けてから、仙台市に住む息子夫婦（私の友人）が手伝いに来てくれて畳を捨てたり家具の移動をしてくれたりとしていたのですが、人手が足りないということで今回は7人で手伝いに行きました。一ヶ月も経っているのに、木で出来た筆筒がすっかり水を吸って開かない！パールで壊しながら開けるしかない。開けても中の着物などは色移りして使い物にはなりません。おばあちゃんは「一回も袖を通していない訪問着なのに。仕方ない。」と言いながらも捨てられず、筆筒から出して途方に暮れていました。



一時が万事そんな感じで、一度は仕方ないと思いながらも思い入れのある品々。そう簡単に気持ちの整理がつく筈も無く、気丈に振舞っている姿がなんとも言えませんでした。人が来てくれると気分も明るくなるのか、「休憩しましょう」と声を掛けてくださって、震災当日はどれほど怖い思いをしたのかとか、手伝いに来てくれた義理の息子（私の友人）がどれほど嬉しかったか、など言葉が溢れて溢れて。聞く、傾聴するって、このことか、とその時初めて実感しました。作業そのものはドロの撤去もなく、がれきの撤去もなく、津波に浸かったお宅の片付けという内容でしたが、拭いても掃いても洗っても砂が無くならない。町全体が砂まみれで、全てが砂っぽい。風が吹くと砂嵐のようでした。津波の恐ろしさを別の角度から知ることが出来ました。



*日和山から見た石巻市街

作業が終わり、日和山から石巻市街地を一望したとき自然と涙が溢れて止まりませんでした。「がんばろう」などと軽々しく言えない現実を突きつけられて何も言えない自分がいました。人手はまだまだ足りないし、やらなくてはならない事がたくさんあります。出来ることは限られているし一人ひとりの力は小さいけれど、何かせずにはいられない気持ちがますます沸いてきました。今後も機会をみて手伝いに行きます！

待っていて下さい！

（仙台市在住、佐藤奈於子、当応援紙ボランティアスタッフ）

編集後記

お花見をする間もなく桜も散ってしまいましたが、仙台市中心部ではケヤキの新緑が眩しく輝き始めました。被害の大きかった沿岸部のお宅でも、泥の下には新芽を発見できました。私たち人間の生活とは全く関係なく、自然は粛々と今を生きているのですね。与えられた環境で、文句も言わず欲張りもせず、ただひたすらに生を全うする。その姿に私たちは学ぶべきことが多くあるはずです。自然や環境を変えるのではなく、今度は私たち人間が変わらなければいけません。私たちの戦いは始まったばかり！震災後に感じた想いを風化させないよう、私自身、今できることを粛々と続けていきます。（山田裕美）

発行：仙台市災害ボランティアセンター 広報班 黒田

TEL022-262-7294 <http://www.ssvc.ne.jp/> 当紙がWEBで読めます！

編集：広報ボランティアチーム 遠藤、大谷、木村、佐々木、佐藤、茂木、山田

連絡先：仙台市災害ボランティアセンター Eメール sendai-vc@poppy.ocn.ne.jp

